様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　21 年　6 月　29 日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2006～2008
課題番号：１８５３０６９６
研究課題名（和文）
世界遺産熊野地域の言語表現の豊かさの解明と教材開発
研究課題名（英文）
Study on Possibility of Linguistic expression in Kumano Area

研究代表者
伊藤　隆司（ITO TAKASHI）
立命館大学・産業社会学部・教授
研究者番号：５０１５９８８６

研究成果の概要：

(1)熊野市市街地、飛鳥町、紀和町における方言調査をふまえ、熊野らしさを体現している「タバル」（いただく）関係の語彙に焦点を当て、小学校の授業で活用可能なビデオ教材を２編作成した。(2)小学校５・６年生を対象としてビデオ教材を用いた実験授業を行った。(3)熊野市立飛鳥小学校の学校文集を中心として、教材化にむけた分析作業をすすめた。(4)以上の成果を報告集（A4判65頁）にまとめ、当該地域の小中学校に還元した。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2006 年度	800,000	0	800,000
2007 年度	400,000	120,000	520,000
2008 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	1,700,000	270,000	1,970,000

研究分野：教科教育学
科研費の分科・細目：教育学　教科教育学
キーワード：熊野　教材開発　方言　ビデオ教材　作文　文集

１．研究開始当初の背景

(1)熊野地域に関する研究は「熊野学」という名称で様々な分野から取り組まれ始めていたが、教育学的側面からの研究は端緒についたばかりであっ

た。

(2)独特の風土と文化を持つ熊野地域における言語表現およびその背後にある生活現実の中には、現代の児童生徒のための教材となる可能性を持ったものが少なくないが、その調査研究や分析作業は未開拓であった。

２．研究の目的

(1)熊野地域において発行された学校・地域文集の収集・分析を行う。

(2)熊野市とその近郊で高齢者を対象として方言語彙や民話の収集・収録を行う。

(3)資料の分析をふまえた教材の開発を行う。

(4)教材に基づき実験授業を行い、その効果を検証する。

３．研究の方法

(1)熊野市市街地、飛鳥町、紀和町を中心として方言調査を行い、特徴的な言語表現の抽出と分析作業を進める。

(2)「タバル」という表現に着目し、その語源と使用例等を分析し、メディア教材の開発を行う。

(3)熊野地域における文集の収集を進めるとともに、熊野市立飛鳥小学校における学校文集に収録された作文を手がかりとして、児童の生活と意識の変化の特徴を分析する。

(4)開発した教材を用いた実験授業を行い、その効果を検証する。

４．研究成果

(1)これまでの熊野市市街地、飛鳥町、紀和町の高年層における方言調査の結果の中で、信仰の地、熊野らしさを最も体現している「タバル」(いただく)関係の語彙に焦点を当て、小学校の授業で活用可能なビデオ教材を２編作成した。８世紀頃の使用例にまで遡れるこの「タバル」は、「たまわる」から派生した「タバワル」が語源と考えられ、熊野においては、元来「お月見の夜に神様から供物をいただく」という神仏語彙の中でも用法が限定された敬意の高い形式であった。そこから、神仏用語の意味範囲の中で、「お月見に子供達が家々を回って供物をもらい歩く行事名」や「普段の神仏より供物をいただくこと」に意味を変化・拡張させつつ、敬意を低減させていった。更には、神仏用語以外の「お手玉を受けること」にも意味を拡張させ、益々敬意を低減させた後、現在の熊野の若年層では、完全に敬意を失った上記行事名としての「タバラシテ」のみを使用している。

(2)この方言調査に基づく意味変化の流れが伝わるようなビデオ教材２編を鈴木幹夫氏(熊野市立入鹿小学校)が使用し、５、６年生を対象に、作文教材と組み合わせて授業をおこなった。その授業では、子供達の価値観を揺さぶることができ、我々も国語教育における作文教材と方言調査に基づくビデオ教材の有機的な組み合わせ方について多くの示唆を得ることができた。

(3)熊野市立飛鳥小学校の学校文集を中心として、教材化にむけた分析作業をすすめた。

飛鳥小学校学校文集『杉の木』の創刊号から

第１０号が発行された１９６３年から１９７３年にかけては、いわゆる高度経済成長政策によって、日本中の至る所で、地域や生活が激変した時代である。とりわけテレビの普及は、コマーシャルや番組を通じて、大量消費、使い捨て時代の到来を喧伝し、日本人の生活と意識の形成に多大な影響を持つようになった。近代化・都市化の流れが優勢な時期にあっては、地元の暮らしの中に息づいていたさまざまな風物・文化・価値観などから目をそらせるイデオロギーが流布され、多くの人々が、都市の消費生活にあこがれ、都市化を受け入れた。

学校文集『杉の子』には、３号から８号にかけて、道路や「いなか」を問い直す作文が数多く収録されている。たとえば、森本博文(５年生）は、作文「僕たちの村」の中で、「こうかいてみると、ぼくたちのすんでいる村は、都会よりずっとずっといいのになぜ若い人たちは村から去っていくのだろう」という「問い」をなげかけている。地域と暮らしをめぐる問題は、その後今日に至るまで、未解決のままの重要テーマである。

文集を手がかりとして、子どもたちが「まち」と「いなか」を、それぞれ、どのようなものとしてとらえていたかを抽出した。子どもたちのいう「いなか」とは、田や川や山が、それとして、そこに「在る」というだけのことではなかった。遊んだり、作ったり、登ったりするからこそ値打ちがあり、友だちや家族などの人々とつながる場所であることにこそ意味が見いだされていたのである。それは、子どもたちのいう「まち」が、プラモデル・本・おかしなどの商品や、列車や遊園地などの利便性や刹那の快楽をもって語られているのとは対照的であった。

人と物、人と人、人と自然、人と地域がどのように関わり合い、その中で、どのような価値や願いに目覚めてきたのかを問うことは、「まち」と「いなか」という対立を超えて、これまで、そしてこれからの人々の生き方、地域の在り方を問い直す契機になるに違いない。

経済成長がなければ人間は豊かになれないのか。遊びは「時間の無駄」なのか。モノ自体に価値があるのか。速いのが良くて、ゆっくりは悪いのか。そこにないものをねだることより、そこに在るものに意味を見いだせないか。山や川や自然とのかかわりの中で、熊野の子どもたちが育んだ感性や知性や生活技術から、今日的に学べるものを今後一層明らかにしていかなければならない。

(4)以上の成果の詳細は、『平成 18 年度～20 年度科学研究費補助金基盤研究（C）研究成果報告書 世界遺産熊野地域の言語表現の豊かさの解明と教材開発』（A4 判 65 頁）として、報告集にまとめ公表した。

(5)授業記録、文集分析を含んだ上記の報告集は、教材的価値もあるため、熊野地域の小・中学校に還元した。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔その他〕（計４件）

(1) 余健、丹保健一「熊野の語彙」『平成 18 年度

～20 年度科学研究費補助金基盤研究（C）研究成果報告書　世界遺産熊野地域の言語表現の豊かさの解明と教材開発』pp.1-18　2009 年　査読なし

(2) 鈴木幹夫「熊野の子どもと遊び」『平成 18 年度～20 年度科学研究費補助金基盤研究（C）研究成果報告書　世界遺産熊野地域の言語表現の豊かさの解明と教材開発』pp.19-34 2009 年　査読なし

(3) 伊藤隆司「熊野の子どもの生活と表現」『平成 18 年度～20 年度科学研究費補助金基盤研究（C）研究成果報告書　世界遺産熊野地域の言語表現の豊かさの解明と教材開発』pp.37-61 2009 年　査読なし

(4) 伊藤隆司「三重県熊野地域の文集資料調査結果報告」『平成 18 年度～20 年度科学研究費補助金基盤研究（C）研究成果報告書　世界遺産熊野地域の言語表現の豊かさの解明と教材開発』pp.62-65　2009 年　査読なし

６．研究組織

(1)研究代表者

伊藤 隆司(ITO TAKASHI)

立命館大学・産業社会学部・教授

研究者番号：50159886

(2)研究分担者

丹保 健一(TANBO KENITI)

三重大学・教育学部・教授

研究者番号：40115712

余 健（YO KEN）

三重大学・教育学部・准教授

研究者番号：90345968

(3)研究協力者

鈴木 幹夫（SUZUKI MIKIO）

熊野市立入鹿小学校・教諭